

昭和五十八年度 特別研修員研究発表要旨

初地の菩薩の十大願について

赤尾 栄慶

『華嚴經』十地品は、大乘の菩薩の歩みを具体的かつ段階的に説き示したものである。十地とは經文に

十地者是一切佛法之根本。菩薩具足行是十地、能得一切智慧。(大正9・五四三c)

とあるように、まさに一切の仏法の根本に他ならない。十地の行を修することによって、菩薩は一切諸仏の智慧を体得するのである。その十地の第一が歡喜地であり、この地に於て菩薩は初めて「過凡夫地、入菩薩位」(大正9・五四四c)「することになる。經文ではこの前に大悲を首とした菩提心を発すことこそが凡夫地を過ぎて菩薩位に入る条件であると述べられ、然る後、菩薩は歡喜地に安住し、所謂初地の菩薩の十大願を發すに至るのである。

そしてその十大願によって初地の行(十行)が造修され、初地の行の成就によって果(四果)が招かれることになる。これを逆の面から見れば、果というものは具体的な行によって招かれるが、もしそこに願がなかったならば行をして所期の目的に至らしむることは不可能となるといえよう。ここに於て、行の背景としての願が重要な意味をもってくると考えられるのである。

以下は、賢首大師法蔵の指南によりながら初地の菩薩が發す十大願の内容とその意義を考察することとする。

それでは、まず「願」の意味を法蔵はどのように捉えているのであろうか。『探玄記』卷第十一によれば、

願は希求義。地論云、發諸大願者隨心求義故。(大正35・三〇六a)

と述べられている。すなわち、願とは求めることを定め、それを得ようと希い求めることであり、具体的に何々の事をなそうとする心の表白である。このような願は初地に於ては十大願として述べられている。今、法蔵の所説を参考にすれば、十大願とは次のようである。

- 一、供養願 清淨なる心を以て一切諸仏を供養せんとする願。
- 二、受持願 一切諸仏の所説の經法を受持し、諸仏の教化する所の法に隨順し守護せんとする願。
- 三、請轉法輪願 大集の中に於て仏に轉法輪を請う願。その大集の中の上首となろうとするもので撰法上首願ともいう。
- 四、修行願 諸波羅蜜を撰し、一切衆生を教化しそれをして行を受けしめ、心を增長することを得んとする願。
- 五、教化衆生願 三界六道の一切衆生の差別を撰し、教化成熟して一切世間道を断じ仏法に安住せしめんとする願。
- 六、知世界願 一切世界の形等の差別をすべて現前に了知せんとする願。
- 七、淨土願 一の仏土を清淨にし、正法と能く修行する衆生とを撰取し安立せんとする願。
- 八、不離願 一切衆生の生処に於て恒に諸仏菩薩と相離れずして一切諸菩薩と同心同学の行を具足せんとする願。
- 九、利益願 不退輪に乗じて菩薩道を修し、身口意の三業を以て衆生を利益すること空しからざらんとする願。

十、成菩提願 一切世界のすべての衆生と共に無上菩提を成じ、八相成道を作して衆生を利益せんとする願。

以上が十大願の概略であるが、經文に於てはこの十大願の一一の結びに「廣大如法界、究竟如虚空、尽未来际、……無有休息」（大正9・五四五b～六a）」と誓われている。これはすなわち横の広がり、更には時間的な制限を受けることがなく決して息むことのない無尽の願たることの表現である。これをより強調しているのが「十不可尽法」（大正9・五四六a）」の句である。衆生・世界・虚空・法界・涅槃・仏出世・諸仏智慧・心所縁・起智・世間転法輪智転の十が不可尽であるが故に初地の菩薩の願もまた尽きることがない。これを法蔵が『探玄記』巻第十一に

第四願願無尽有二。初、初学十法無尽。二、願反要。彼若有我願乃尽。三、願順同彼無尽。故願亦無尽。（大正35・三二〇a）

と釈し、十法の尽きることがないことよって反って菩薩の願も無尽であるとしているのを見る。このようにして初地の菩薩は歡喜地に住し、十大願を首となして無量の大願を發すことになる。そして十不可尽の法を以て反って願を發し、この願を成就しようとしてますます勤行精進するのである。

それでは初地の菩薩が發す願がもう意味は如何なるものであろうか。これにはまず初地の何たるかを吟味しなければならぬ。法蔵は『探玄記』巻第十に於て『成唯識論』（大正31・五一a）の所説を引用し、次のように述べている。

唯識論第九云、一極喜地、初獲聖性、具証二空、能益自他、生大喜故。解云此有三義。一得位、二証理、三成行。皆初獲得故生歡喜也。（大正35・三二〇a）

極喜地（歡喜地）とは迷妄流転せる凡位より聖位に入り、初めて二空所顯の真如を体得し、自利利他の二行を修することにて大歡喜を生ずる地なのである。これが先の「凡夫地を過ぎて菩薩位に入る」ということであり、この地に於てまさに凡夫の性を捨離するのである。その凡夫の性と煩惱・所知の二障の中の分別起の煩惱を指す。これが異生性障であり、この異生性障を断ずることがすなわち聖性を得ることなのである。

初地の菩薩の十大願とは厚く善根を集めた衆生が菩提心を發す、この事実によつて迷妄流転せる凡夫位より真如を体得した聖位に入る、その菩薩が歡喜地に安住した直後に發されたものである。この点からいえば、十地の初に住した菩薩が具体的な相をとつて歩みはじめた第一歩といえる。それは真如に触れることのできた菩薩の内面を物語るものである。それ故、この願の体性について『探玄記』巻第十一には、

六約究竟。梁撰論第十云、此十願至登初地乃得成立。何以故。此願以真如為體。初地能見真如故。（大正35・三〇六c）

と『梁撰論』（大正31・二二五c）の所説を以て究竟に約すとしていることも首肯できるのである。これはまさに真実なるものに触れたその事実が願を支えていることを意味し、この十大願はこれから十地の位を歩もうとする菩薩の内的エネルギーの發露とも見られる。この点では、この大願はただ単に初地だけの問題ではなく、十地の行全体を貫ぬいて菩薩の歩みを支えているといえる。願をもつことのない菩薩の行はあり得ない。仏道を歩む上で初めて体得した真如を内景とするのが初地の菩薩の行であり、その菩薩の願を具体的に表現したのが今の十大願であるといえる。